



## 赤沼 聖吾

一般社団法人東北経済連合会  
東日本大震災復興対策委員会 副委員長

# リオ・オリンピック 2016

今回、寄稿依頼を受けましたのが、リオ・オリンピック閉幕の翌日でした。巡り合わせと思いますが、オリンピックのことを会報に書き留めておくことが、今回の担当の役割であろうと考え、皆さんと共有した感動を、思い出しながら、筆を進めたいと思います。

政治・経済・治安・ジカ熱などの不安を抱えたブラジルで、しかも、スポーツ界がドーピング問題で揺れる中、開催されたオリンピックでしたが、多くの心に残る名場面が生まれ、オリンピックで勝つ難しさ、スリル、醍醐味を充分に感じ取ることができました。

準備段階では、あまり評価の高くなかったブラジルでしたが、最終盤のサッカーで、延長PK戦で、最後に、ネイマールがシュートを決め、最高の形で金メダルを獲得したのは、大会を支えた日系人も多く含まれているブラジル国民への、天からの贈り物ではなかったかと思えます。

日本選手団は記録となる41個のメダルを取り、連日、感動を送り続けてくれました。12時間の時差で、私は、就寝前に一・二回戦を観て、早起きして決勝戦を観たりしていましたが、注目する競技では、夏休みであったこともあり、夜通し応援し続けた方も、多かったことと思います。

10代から20代前半のアスリートの活躍に目を見張るものがありました。東北出身者も、名勝負を演じてくれました。

今回、選手強化が成功したと言われていています。各県レベルで素質のある若い人材を掘り起こし、合宿し、厳しい練習と競争の中で代表選手が鍛えられ、育っていったと言います。若いメダリスト達が、試合後のインタビューで、2020年の東京オリンピックに向けての抱負を聞かれ、「誰にも負けない練習量で、心と技を磨き、さらに上を目指す」と答えている姿に、好感と頼もしさを覚えました。

最近、「楽しんでプレーできた」というアスリートの発言が多くなっていることに、私は、違和感を覚えていました。「楽しんで」は、「リラックス」という意味であろうと考えていますが、今回は、その発言が少なく、男子体操の内村航平選手が、0.099点差で個人総合優勝を果たした後に発した、「もう何も出来ないところまで出し切って取れたので、嬉しいというよりも幸せ」という言葉に、想像を超えた練習量と、それに支えられた自分に対する信頼、何が何でも勝つという高い精神性と達成感を感じ取ることができ、「楽しんで」とは異次元のレベルで、勝負していることが伝わってきました。

今回、スポーツの持つ力を、感動を通じて、あらためて気付かされました。今、日本が失いかけている自信と連帯感を取り戻す処方箋を、若いアスリート達が、示してくれているように思います。

今後、選手強化が東京オリンピックのメダル数のためだけに、行われるのではなく、将来の日本・世界を支える若者を育てるという目的で、継続・充実させることが、重要であると考えています。

(鹿島建設株式会社東北支店 常任顧問・あかぬま せいご)